

総合教育研究センター

学生向け情報誌

クレードル

第6号

# CRADLE

Center for Research And Development of Liberal arts Education  
6th issue

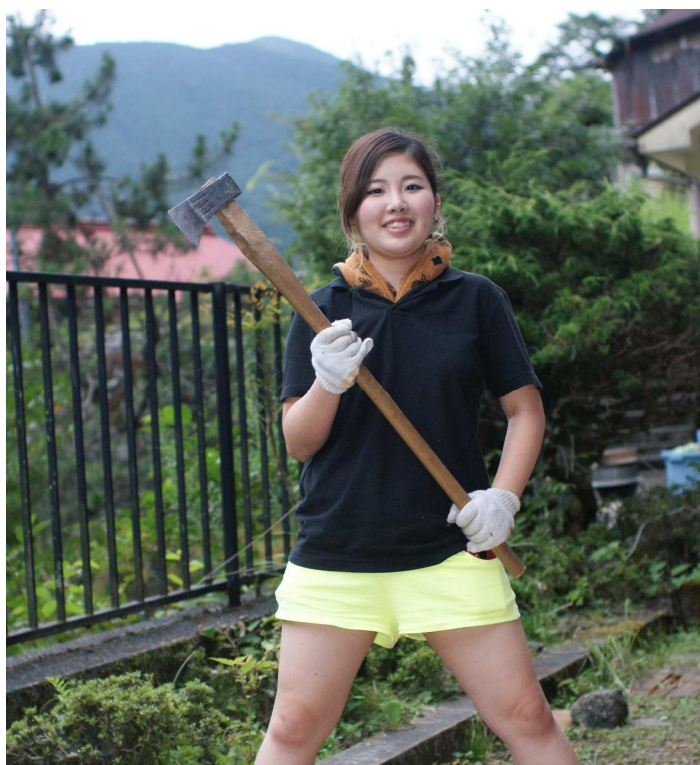
## 2014年夏 「森に生きる」

伊藤 義之（人間学部総合教育研究センター）

8月初旬、奈良県川上村で総合科目「森に生きる」の実習が行われました。今年は初参加者率と女子率が高いフレッシュな年になりました。合宿には大阪府立大学の緑地環境科学科の学生も4名参加することになり、天理大学の学生とあわせると学生の参加は総勢女子11人、男子4人でした。このほか実習を体験したOBや引率教員、ボランティアの教職員などもまじえ、にぎやかな実習でした（合宿の詳細は次ページ以降）。

ただ台風には悩まされました。出発する前から期間中に台風が直撃すると言われており、毎日雨が降り続いて作業ができなかったらどうしようと不安な思いで出かけました。が、予報はいい方に外れ、雨はほとんど降らず順調に日程が進みました。ただ最終日の一日前、それまでの分を取り戻すかのような、滝のような大雨となりました。作業は全くできません。次の日は近畿直撃の予報。やむなく予定を一日切り上げて帰ったのですが、帰り道は土砂崩れで通行止め。遠回りをして這々の体（ほうほうのてい）で帰り着いたのでした。

この話には後日談があります。切り上げた分を秋学期にやることにしたのですが、その日がまたまた台風直撃。こんなに台風にたたられる年もめったにありません。久しぶりの再会もかなわず、これも中止。冬に仕切り直しの予定です。台風、まさか真冬にはもう来ないでしょうね。



### 第6号 目次

pp. 1-5

「森に生きる」実習報告

p. 6

「国」と「地域」のありかた

「海の向こうの出来事」をどう捉えるか

p. 7

ベルリンの壁崩壊から25年目

ベルリン訪問小記

p. 8

こころの健康法4

映画を見ましょう

# “森に生きました”

## 参加者の感想で綴る「森に生きる 2014」の記録

### Day 1 (8月6日)

#### 出合いの緊張感そして期待感

森に生きる1日目 数回顔を合わせたことがあるくらいでほぼ初対面の他のメンバーと仲良くなれるかとても緊張していました(野田沙良)。1日目は初対面がほとんどだったので、名前と顔を一致させることで必死でした(山中三和)。出発する前は本当に不安でいっぱいでしたが、親切な人が多く心配より期待や楽しみでいっぱいになりました(山下裕子)。

#### 宿舎入り

車から荷物やふとんを運びました。疲れたけどトレーニングと思って頑張りました(藤田和子)。荷物運びや山道を歩くのは思っていたよりも体力を奪われました(菅野紗矢香)。昔ながらの縁側があり、趣のある民家でした。ご飯を炊くかまどやお風呂をわかすかまどがあり、日常生活では体験できない貴重な体験ができるとおもいました(梶本貴文)。

#### 初めての体験

午後には木の切り方を指導していただき、単純な作業であると考えていたが木を切ることはとても危険な行為であることや手順をふむことの大切さを学ぶことができた(菅野紗矢香)。



1本を切るのにノコギリをつかわせていただいたのですが、なかなか力仕事でしんどかったです。でも、2人協力してノコギリで切り、みんなの力で引き倒した時はすごい達成感を感じました(中川真衣)。今日は初めて薪割りをしました。最初はコツがわからなくて力をいっぱい使っていたのでとても疲れましたが、少しずつ分かってきてオノの重さだけで割れれことが分かって楽にできるようになりました(吉澤正)。

### Day 2 (8月7日)

#### 間伐体験

今日から本格的な作業が始まった。山の中に入り、登ってどの木を切るかを決め木を切った。山を登って行くのがとても大変で足場を確保するのに苦労した。また、足場を確保しながら木を切らなければいけなかったが怖かった(岡本彩)。朝食が終わって、みんな着替えをして車に乗って森に入って作業をし始めた。二つのチームに分かれて作業した。うちのチームは、もくさん(OB 篠原聡君)の指導の下で3個の木を切った。この作業で、木の切り方についていろいろな知識や技術を身に付けた(趙明圓)。間伐作業はしんさん(OB 新志孝文君)に教わりながらロープをくくったりノコギリやオノを使ったりして、難しい所もあったが木

が切れた時や木が倒れていく時は達成感で満たされた（今西智香）。林業の基本内容は授業にてある程度既習であったが、実技となるのは初めてであった。鋸で伐るのは細い木であっても結構な労を要する。搬出での大変さは身に染みた（片岡拓也）。間伐作業は最初は木を倒すなど本当におもしろいのか。とっていました。でも、実際に木を倒してわかったことは、めっちゃハマりました（高木一樹）。

### お昼の楽しみ

昼間は川で休憩することになり、そこでは5 mほどの高所から川へ飛び込むことも出来るようなので、もちろん飛び込むしかなかった。多少怖かったが、飛んでいる間は気持ち良く、水の中へはいるとすごく冷たくて風邪をひかないか心配になった（山村和寛）。昼食・川遊びの時間帯には、涼しい川のそばで昼食をとり、足元を冷やすことでずいぶんと午前の疲れがとれました。水もとてもきれいで、夏とは思えない冷たさに驚きました。森の中ではありませんでしたが、水の音や気温のここち良さから、20分ほど石にねころがっていました（菅野紗矢香）。



## Day 3 (8月8日)

### 森に生きてるゾー

今日は伐採作業は全くなく、遊歩道づくりに徹することにした。その作業が、この実習で初めての感動を与えた。自分たちの知恵をしばって階段などを作り、それが自分たちが頑張った成果なのだ実感できたからだ（山村和寛）。私は仲先生と道作りを行いました。仲先生が倒れている木を切ってください、私は木と木の間にその切った木をかけた所の道を整えました。歩きやすい遊歩道をつくれたのではないかなあ、と思います（初田有香）。午後は木の皮をはいだりすこし道を整備したりしました。木のつるにぶら下がってターザンみたいにして遊びました。切れそうで怖かったけど意外と強くて大人の人がぶら下がっても切



れなかったのでつるって強いんだなと思いました（藤田和子）。だんだん木の切り方もわかり、おもしろくなってきました。森の中に入るのも、はじめはヒルなどにかまれるのを嫌だなあと思いながら入っていたのですが、だんだんかまれた時はかまれた時！という気持ちで慣れてきました（中川真衣）。宿舎ではまき割りをした。初めてやって思ったのがオノがとても重かった。うまくオノの刃が入って割ることが出来ると気持ちが良かった（岡本彩）。

## 突然、終わりを告げられる

夜雨がふり出してきた。そして「明日帰る」といわれ「まじか!!」とさげびそうになりました（杉本夏輝）。夜、明日帰ることになったことを聞き、びっくりしました。最後の夜はみんなで楽しめました。今日が最後で辛いです（野田沙良）。翌日の帰りが発表され、最後の夕食となったが、人とのキョリが近くなりとても楽しい思い出となった（山中三和）。天理に戻りたくない。またみんなとここで暮らしたい。友達もできて楽しい。今日までいろいろあって全部いい思い出だと思う。この授業は作業の知識だけでなく、みんなと一緒に楽しく暮らすのも大切だと思う（趙明圓）。今までビールは苦手だったが、この日はうまかった。外部参加なのに全くアウェイ感もなく、みんなフレンドリーですごく楽しんだ夜だった（片岡拓也）。

## Day 4 (8月9日)

## ラスト・デイ

4日目でまさか帰ることになるとは思いませんでした（高木一樹）。台風による大雨で今日帰らないといけなくなってしまうととても残念で、昨日までの遊歩道作りが懐かしくなった（今西智香）。帰り支度です。雨すごいです。ふとん運ぶのも大変。荷物も大変。家の下の山をみたらなんと新しく川ができていました（吉澤正）。川遊びや BBQ をすごく楽しみにしていたのですが、何もできなくて残念でした。遊歩道作りももう少しやって、薪割りもやり、普段体験できないことをもう少しやりたかったです（梶本貴文）。

## 参加者一覧

	氏名	所属	学年	性別
1	初田 有香	人間学部人間関係学科臨床心理専攻	4	女
2	今西 智香	人間学部人間関係学科生涯教育専攻	3	女
3	菅野 紗矢香	人間学部人間関係学科生涯教育専攻	3	女
4	野田 沙良	人間学部人間関係学科生涯教育専攻	3	女
5	趙 明圓	国際学部外国語学科日本語専攻	3	女
6	岡本 彩	国際学部外国語学科英米語専攻	2	女
7	中川 真衣	国際学部外国語学科英米語専攻	2	女
8	山下 裕子	国際学部外国語学科英米語専攻	2	女
9	高木 一樹	国際学部地域文化学科アジア・オセアニアコース	2	男
10	吉澤 正	国際学部地域文化学科アジア・オセアニアコース	2	男
11	藤田 和子	体育学部体育学科	1	女
12	山中 三和	大阪府立大学	4	女
13	梶本 貴文		4	男
14	山村 和寛		4	男
15	片岡 拓也		4	男



## 活動一覧

## &lt;事前研修&gt;

第1回	5月12日(月)	午後4時半～5時半	「科目の趣旨や概要、注意点の説明」
第2回	6月9日(月)	午後4時半～6時	「森林の働きについて」
第3回	7月14日(月)	午後4時半～5時半	「吉野林業と村の伝統的生活について」

## &lt;現地実習&gt;

於 川上村	8月6日(水)	午前10時	集合・大学出発
		午前11時半	現地到着
		正午～午後2時	荷物運び入れ・宿舎準備
		午後2時～4時	水源ツアー・伐採体験
	8月7日(木)	午前9時～正午	間伐作業
		午後1時～4時	遊歩道作り作業
	8月8日(金)	午前9時～正午	間伐作業および遊歩道作り作業
		午後1時～3時	遊歩道作り作業
	8月9日(土)	午前9時～午後1時	宿舎片付け・清掃
		午後2時	現地出発
		午後4時	大学到着・解散

## 「森に生きる」に参加して

木を1本切ることここまでの時間、労力がかかるとは思っていませんでした。また遊歩道作りは木を切ってくいを作り、土に打って階段や道を作ります。人が歩く道というのはこうやってできるんだなど知りました(山下裕子)。今年はリピーターが少なく、作業や生活がうまくいか不安でしたが、みんなテキパキと動いてくれ、すごいなあと思いました(初田有香)。このような古い民家で暮らしたことがなかったので、どこをどうすればよいか戸惑うことでいっぱいでした。水はどう使うのか、火のつけ方、ごはんの炊き方などわからないことだらけでしたが、家事を手伝うことにより自然とわかるようになっていくのがうれしかったです(菅野紗矢香)。体験を重視するこの研修は、点数とか

成果として出にくいかもしれないが、教育上、大きな意義のあるものだと思う。ここまで学生の自主性にまかせるようなスタイルも珍しいと思うし、いいと思う(片岡拓也)。食事の準備、洗濯、風呂焚き、薪割りなど日常生活をみんなで分担して行う生活は大変でしたが、みんなでワイワイできたのでよかったです。林業体験は前からやってみたく思っていたので、今回は私に



にとってとても有意義な体験となりました。将来このような仕事を行うかもしれないと思います(梶本貴文)。森の中でいろいろな作業を経験をして、充実したものになった。最後の日まで作業ができず楽しいイベントにも参加できなかったが、来年も友達を誘って「森に生きる」に参加したいと思った(今西智香)。

# 「国」と「地域」のありかた

## —「海の向こうの出来事」をどう捉えるか—

山本 和行（人間学部総合教育研究センター教職課程）

2014年9月18日に実施された、スコットランドのイギリスからの独立の賛否を問う住民投票は、「独立反対」が約55%の票を獲得し、投票直前の「独立賛成」派の盛り上がりからすればやや差の開いた結果となり、ひとまず現状の国家体制を維持することに落ち着きました。とはいえ、今回の住民投票の結果は、有権者の45%弱の人々が「独立賛成」に票を投じたという事実が示されたということでもあります。このことは、スコットランドの問題だけにとどまるものではなく、今後のイギリス国内の各地域における「高度な自治」のありようが問題になる可能性が高いばかりか、ヨーロッパやその他の国々における特定地域の独立志向に拍車をかける可能性についても言及されています。先進国において「高度な自治」や「独立」について論じるための貴重なモデルケースとして、今後も参照されつづける「歴史的事件」だろうと思います。

台湾に関する研究を進めている者としては、イギリスとスコットランドとの関係を見てみると、どうしても中国と台湾・香港との関係を想起せざるにはいられません。もちろん厳密に言えば、イギリス／スコットランドの関係性と中国／台湾・香港との関係性とは同じではないでしょう。特に、台湾は事実として国民国家としての機能を果たしながらも、国際的承認を欠いた状態のまま「地域」と位置づけられているような現状にあって、中国と台湾との関係を単純な「国」と「地域」との関係として捉えることはできないだろうと思います。

では、中国と香港との関係性はどうか。19世紀から約150年間、イギリスの植民地だった香港が1997年に中国に返還されてから、香港は中国の「特別行政区」として「高度な自治」を与えられています。「高度な自治」が国家から与えられているという意味では、イギリス／スコットランドの関係性から中国／香港の関係性を想起しても不自然ではないかもしれません（こう書いてみると、スコットランドと香港には「イギリス」という共通項がありますね）。150年にわたる植民地統治の歴史的経験と金融センターとしての香港の歴史的位置から、「一国二制度（一国兩制）」と呼ばれる統治体制のなかで、中国本土とは異なる要素を内包する政治制度が敷かれているわけですが、その香港でも最近、「国家」と「地域」との関係性にかかわる「事件」が議論になっています。

香港の行政機関のトップは「行政長官」といいますが、この行政長官を選出する選挙制度の改定が検討されています。これまでは各種議員や企業・団体の代表者で構成される「選挙委員会」を通じて行政長官を選出するという間接代表制を採っていましたが、「普通選挙」の実施を見据えて、これを直接代表制に移行させる計画が議論されています。しかし、中国の全国人民代表大会の常務委員会は香港の選挙制度改革として、新たに「指名委員会」と呼ばれる機関を設置し、「指名委員会」の過半数の支持を得た人物のみが立候補できる制度を採択したと報じられました。

「指名委員会」の構成はこれから議論されるわけですが、現在の「選挙委員会」の状況から、中国本土との関係強化を重視する「親中派」が多数を占め、香港の民主化を目指す「民主派」が少数にとどまるという状況が想定されることで、新たな選挙制度は結局、「民主派」を事実上締め出す制度であるとして、反発する動きがあらわれています。学生による授業のボイコットや、香港のメインストリートである「中環（セントラル）」の占拠へと向かう大規模な抗議行動が展開され、多数の逮捕者を出しています。学生たちが暴力的な事象に巻き込まれないことを願うばかりです。

台湾同様、学生運動や民主化運動を通じて政府の方針に異を唱える伝統は、香港にも強く根付いています（台湾の学生運動・民主化運動については、『CRADLE』第5号に少し書きました）。そして、そうした動きがスコットランドのような独立の賛否を問う住民投票の動きへと展開していくという考え方も、歴史的な背景や民主化運動の蓄積の厚みを考えればまったく考えられないということはないと思いますが、現実的にそうした動きへと展開していくための条件はまだそろっていません。

ここまで述べてきたことを具体的に考え、「歴史的事件」をこれからの世界を知るための経験としていくためには、イギリスとスコットランド、中国と香港という、「国」と「地域」との関係性をあらゆる面で検討していくことが必要だろうと思います。とりわけ、これまで長年にわたって「当たり前」だと思われてきた「国」のありようが「地域」から揺さぶられるという事態に直面する現代世界のなかで、「国」と「地域」との関係性について考えることは、自分たちが住む世界のありようを直接考えることにもつながるだろうと思います。「海の向こうの出来事」は、もしかしたら、自分の身の回りにある「当り前の出来事」を考え直すきっかけを与えてくれるのかもしれません。

## ベルリンの壁崩壊から25年目—ベルリン訪問小記



浅川千尋（人間学部総合教育研究センター）

1989年11月9日ベルリンの壁が崩壊した。当時のベルリンは、周知のように旧ドイツ民主共和国（東ドイツ）にあり、ベルリン市が西ベルリン（ドイツ連邦共和国の領土）と東ベルリン（旧ドイツ民主共和国の領土）に分割されていた。比較的自由に東西ベルリンの行き来は許されていた。しかし、突如旧東ドイツ政府は、1961年8月13日に壁を作り出しあつという間にベルリンは壁で東西に分断されてしまったのである。そこから、さまざまな悲劇がうまれたのである。壁を越えようとして、射殺された者も多い（正確な数は不明であるが、判明している公式な推定数は約130人である）。

今年の夏にも、ベルリンを訪問した。ブランデンブルク門の前の壁は、現在もちろんない。当時の壁自体がほとんどない。一部ギャラリーとして残されている。そこは、観光地化されていてベルリンの壁の悲劇があまり伝わってこない（と思う）。それでも、ベルリンの街を歩いていると思わぬところに「当時の壁」を発見する。

分断当時、チェックポイントがあり、そこを通過してしか行き来できなくなっていた。いまは、その面影を残す検問所跡とその横に壁博物館がある。観光地化されてしまっているが、それでも必見の価値はある。同じ民族が分断されるというのは、アジアの朝鮮半島がそうである。幸運なことに、ドイツは、ベルリンの壁崩壊から1年もしない1990年10月3日に統一した。このドイツ統一は、ソビエト連邦をはじめとする旧東ヨーロッパ諸国に影響を与え、ソ連崩壊、旧東欧諸国の民主化へとつながっていったのである。そして、1993年には、EU（欧州連合）が成立したのである。

担当している「ヨーロッパ地域統合論」という国際学部の授業でも、ベルリンの壁崩壊およびドイツ統一を簡単に取り上げている。学生にとっては、生まれる前の話であるが関心を抱いて聴いてくれる。いま、ベルリンは開発が進み大きく変わろうとしている。それでも、ドイツ人およびベルリン市民にとって「ベルリンの壁」というものは、けっして忘れてはならない歴史的事象である。今年は、壁崩壊から25周年を迎える。

ドイツ連邦共和国神戸大阪総領事館の以下のHPで「ベルリンの壁」特集が組まれている。是非、参考にさせていただきたい。

<http://www.japan.diplo.de/Vertretung/japan/ja/05-politik/25jahre-Mauerfall-2014/2014-25jahre-mauerfall.html>

## こころの健康法4-映画を見ましょう

仲 淳（人間学部総合教育研究センター教職課程）

みなさんは映画を見るのは好きですか？

アクション、恋愛もの、アニメーション、コメディ、ホラー系、社会派。映画にもいろいろありますが、どれもとても面白いですね。

僕も学生時代はよく映画館に行きました。まだそのころは今と少し違って、大学は出席もそれほど厳しくなく、休講もよくあって、大学生は授業にいかに行かないですむかを考えて、空いた時間を自由に過ごすもの、という感じでしたので(もしかすると僕のまわりだけそうだったのかもしれませんが)、映画もたくさん観に行きました。

僕の映画デビューは、たぶん今も昔も変わらない小学生の時のドラえもん映画からだったと思うのですが(最近ではポケモンとかプリキュアでしょうか)、その後本格的に映画に目覚めたのは高校二年生の頃で、その時観たのが有名な「ローマの休日」でした。オードリー・ヘップバーンさんの美しさにももちろん魅了されましたが、スクリーン(銀幕)の向こう側のロマンチックな世界に夢中になってしまって、クラブの友達三人と市民会館に観に行ったのですが、自転車での帰りがてら、ものすごくうっとりしてしまっていたのを今でも覚えています。(ミーハーな僕はその後大学の卒業旅行でイタリアを旅行した時に、スペイン広場ではジェラードを食べて、「いまは禁止されてるんですよ」とほかの日本人観光客の方に注意され、真実の口には手を突っ込んで抜けなくなる真似をして、友達からちょっと引かれました(笑))。

映画には必ずストーリーがあり、ドラマがあります。苦しいことやつらいことに勇敢に挑んでいく主人公の姿にいつしか感情移入してしまって、ハラハラドキドキしたりもします。映画では普段はあまり気づかないでいる人間の心の奥の方のひだまでが描かれるからなのでしょう。見終わるとなにか心が洗われた気分になるというか、日光のまぶしさに目を細めながらまた日常に戻っていくわけなのですが、「ようし、またがんばろう!」という気分になれるというか、映像を通して“今日を生きる勇氣”をもらえたような気がするものですね。

それから、忘れてはならないのが映画音楽の素晴らしさではないでしょうか。ここぞという場面では必ず心揺さぶられるような感動的な音楽が流れてきますよね。だいたいもうその頃には目はスクリーンに釘付けですから、音楽につられてあふれる涙を止めることができない、なんていうことがざらなわけですね。そして以後はその音楽をちょっと聴くだけで熱くなってしまうようになるという・・・(僕の中では「海猿」のテーマ音楽がそういうものになっています)。

映画を観るにはちょっと時間がかかります。僕は最近あまりゆっくり映画を観る時間を取ることができないのですが、映画館に行けるということ自体がすごくぜいたくな、心にとってのいいことなのかもしれないですね。日常を忘れて立ち止まる時間を与えてくれるというか・・・。

さあ、みなさんもこの週末は映画館に出かけて、好きな映画を観てみてはいかがでしょうか？



### ❖ 筆者の好きな映画いろいろ

千と千尋の神隠し：筆者の中のジブリのベストです。

海猿：かっこいいです。

STAND BY ME どらえもん：ドラ泣きです。

そして父になる：親になるって？人を愛するって？

めがね：美しい与論の海に癒されます。

アベンジャーズ：ヒーローがたくさん出てきます。

インディージョーンズ3：ちょっと古いですがね。

CRADLE(クレードル) 第6号 2014年10月発行

発行者 伊藤義之 天理大学 人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050 電話・FAX 0743-63-7092 (内線) 6111

印刷 株式会社 春日